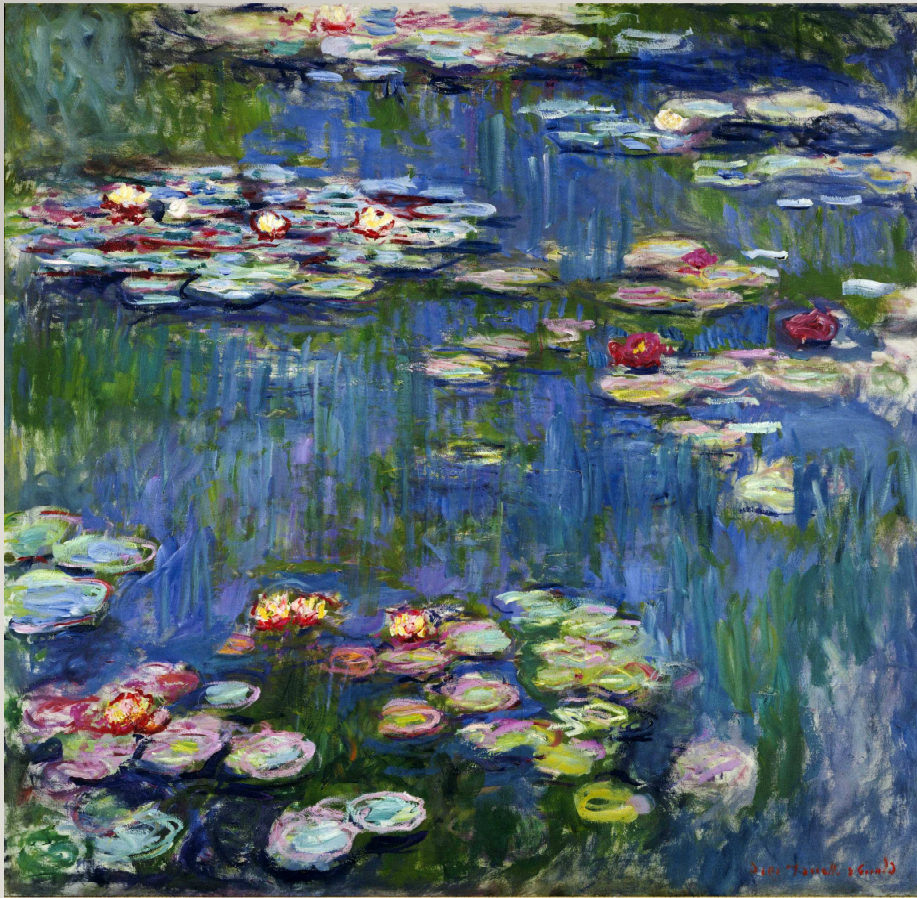




松方コレクションと鈴木商店 ～盟友の夢を支えた金子直吉～

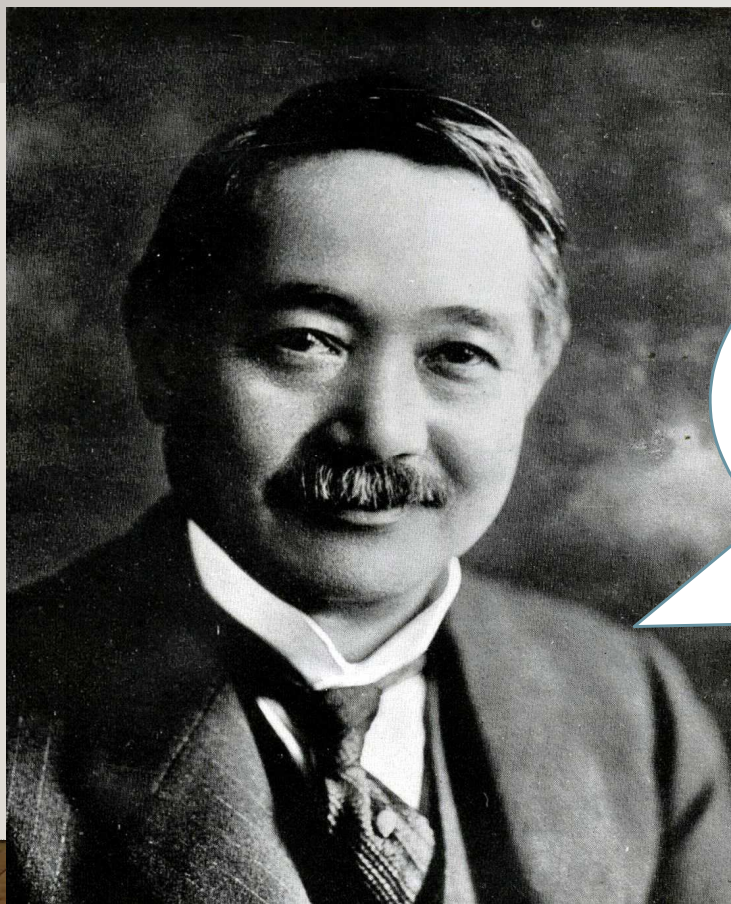
2019年12月14日 神戸新聞論説委員 小林由佳

松方コレクションとは？

- 川崎造船所社長の松方幸次郎が大正初期から昭和初期にかけて欧州で収集した
- 絵画、彫刻、日本の浮世絵など1万点超とされる
- 美術品購入には鈴木商店の多大な支援があった



なぜ、松方は美術品の収集に乗り出した？



本物の西洋美術に直接触れたこと
のない日本人のために、美術館の
門戸を開きたい！
これは、おいの終生の仕事じゃ

鈴木商店の大番頭・金子直吉がバックアップ



美術品は思い切り立派なものを
集めてくださいよ！

鈴木のロンドン支店には松方の専用室も！

松方は豪快な買い方をした

「ある時など店に入ってグルリと見回すと、店主を呼んでこう言った。

『君、そこからここまで全部でいくらかね』

ステッキで指し示したのは壁にかかる絵画すべてである。思わず手揉みする店主の視線を背に受けながら、幸次郎は悠然と葉巻をくゆらすのであった」

～神戸新聞社刊「火輪の海」より～



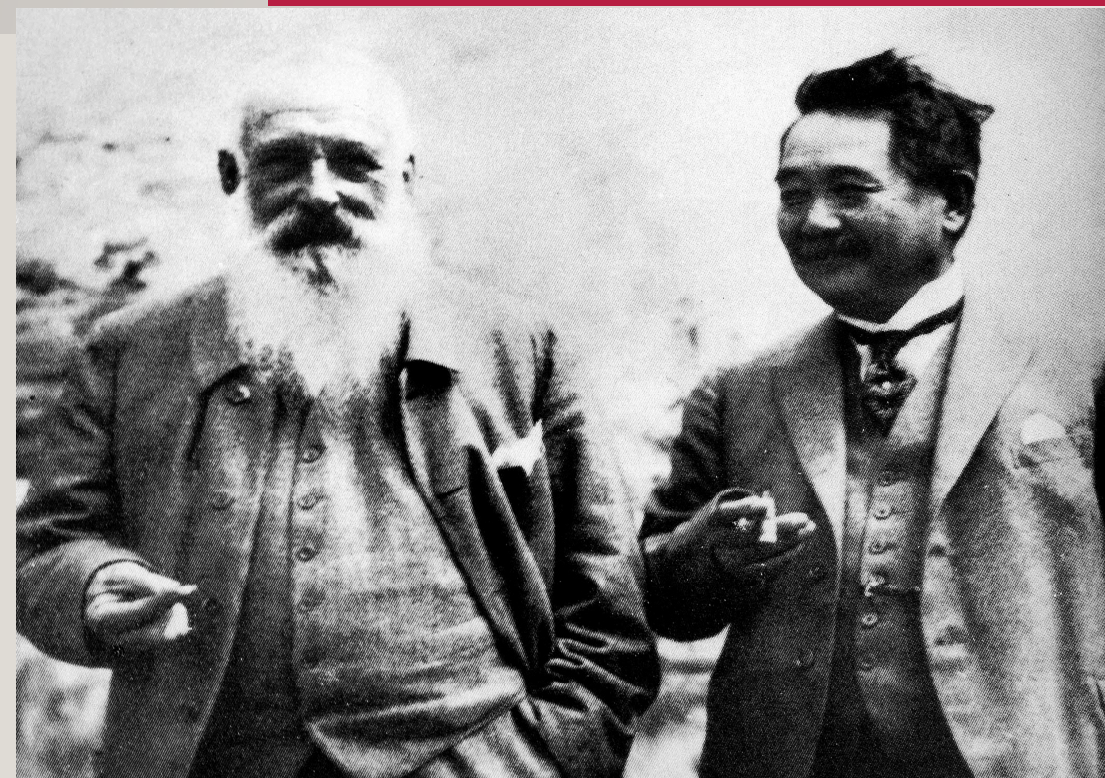
高畑誠一・ロンドン支店長

収集品は歴史に翻弄され、流転した



- 国内にあった作品群は金融恐慌などで売却され、散逸
- ロンドン保管分は第2次世界大戦中に倉庫火災で焼失
- パリにあった作品は戦中にフランス政府が接收。戦後、美術館設立を条件に返還
→東京・上野の国立西洋美術館

コレクションと鈴木商店の支援の総額は？



- ・「自由に使える金が3千万円（現在の565億円）できた。私はそれだけ油画を買って帰り、コレクションをつくりたい」（松方が美術史家・矢代幸雄に語ったとされる）

- ・鈴木商店記念館が国立西洋美術館発行の資料から鈴木商店がベネディット宛てに支払った作品群をひとつずつ拾い出して計算したところ、絵画、彫刻で計300万フラン（約30億円）に上る

クロード・モネと松方幸次郎

フランスとの返還交渉に尽力したのは・・・



- 吉田茂首相

サンフランシスコ講和会議（1951年9月8日）を終えてすぐにフランスの首席全権・ロベール・シューマンに切り出す

「松方幸次郎が買い求めたコレクションがフランスに残っています。それを是非とも日本へ帰していただきたい」

松方と金子 響き合った2人



- ・「国のため」と決断力と行動力を発揮した
- ・事業だけでなく、文化をも現代に残す
- ・本人たちにとってはいずれも日本人としての「仕事」だった

松方三郎氏

(幸次郎の弟、後に養子となった。元共同通信専務理事)

傍若無人といってよいようなワンマンで生涯を通じ、人を人とも思わぬようなところもあった幸次郎が、金子さんだけには一目も二目も置いていたようだった。彼の金子さんに対する敬愛の情は最後まで変わらなかった。

金子さんの場合も幸次郎の場合も、実業家としての末期において世間が与えた待遇は今から考えれば大いに問題であろうが、この二人の優れた実業家が種をまき、育てた事業がいずれもその後大いに伸びていっている事実を見ると、こんなことは問題にするにも値しないような気がする。

仕事そのものに打ち込み、事業を育てていくことが関心の中心であった人たちからすれば、その仕事なり事業なりが十年、二十年後にいかになるかということだけが問題であったらうと思うからである。その意味でこの二人の生涯は、まことに恵まれた生涯であったといえるのである。

